

インクルーシブ教育

東洋大学経営学部 非常勤講師
公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

2016年7月、神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で、入所者19人を刺殺し、入所者職員計26人に重軽傷を負わせる痛ましい事件がおこった。事件は未だ記憶に新しい。犯人は障害者の命を軽んじ、障がい者の生存の意味を否定する言動を繰り返しているとのこと。犯人の障がい者に対する極端な差別意識に嫌悪感を抱く人はきつと多いに違いない。しかし、「働かざる者、喰うべからず」と言われる裏に潜む、働けない人間を排除するような考えは、重度障がい者への生存を否定する考えと根本的には同じではないだろうか。

『母よ！殺すな』という名著がある。脳性麻痺者である横塚晃一氏が口述筆記で記した本である。この本は、1970年5月、横浜で起きた重度脳性麻痺の女児を母親が絞殺した事件を取り上げている。障がい児の介護疲れによる殺人を理由に、地元町内会が母親の減刑嘆願署名運動をするなど、当時、世の風潮は「可哀想な母親を救え」という論調だった。しかし、それに対して、横塚晃一氏は障がい者の立場から異議申し立てをし、真つ向から、反対した。

「重症児『殺されてもやむを得ない』とするならば、殺された者の人権はどうなるのだ」「障害児は殺されるのが幸せか」と挑んだのだ。

高度成長時代、勤労を美德とする

価値観は正当化されていた。今も、大きくは変わらないかもしれない。1965年に厚生大臣の私的諮問機関として、「心身障害者の村(コロニー)懇談会」が設置され、重度障がい者を持つ親族の要望に応え、援護対策として全国に多くの施設が作られることになる。ここに、物言わぬ障がい者の意見はない。これを横塚氏は、働けぬ障がい者の隔離政策だと論じている。障がい者の種類や程度によって、それに合わせた支援をするという名目で、障がい者を隔離することを当然とする価値観を持っていたことに気づかされた。ともに学びたいという思いがあれば、障がい者にとって、コロニーは収容所に監禁されると変わらない野蛮な行為である。

横塚氏の意見に触れて、「働く」という行為を正当化することで、「働けない」という人を蔑むように見たことはないかと自問してしまう。望ましい勤労観の育成を掲げた教育は、健常者中心の考え方に陥っていないか考える必要がある。「津久井やまゆり園」の事件の犯人が、そのような価値観形成によって障がい者を蔑むようになったのでなければよいのだが。教育は、「善」を身につけるしくみであって、犯罪者を生むようなことがあってはならない。

障がいの有無にかかわらず、すべての人が不安や怖れもなく、共生できる

社会の実現を教育は目指さなければならぬ。その実現を目指す世界の潮流の中で、新学習指導要領に「インクルーシブ教育(inclusive education)」の実現が読み取れる。inclusiveとは、「すべてを包み込んだ」という意で、「包括的」と訳すのがよいかと思う。障がいの有無にかかわらず、一人ひとりに配慮しながら、みんな一緒に学ぶ教育だ。そもそも、すべての子どもは多様であり、すべての子どもたちのための教育「Education for All」をスローガンに教育の充実が世界的に図られるようになって四半世紀以上が経つ。十数年前から、インクルーシブ教育という名称が一般化するようになっていく。すべての人の基本的な人権を守り、すべての子どもの教育を受ける権利も奪ってはならない。他国の例では、特別支援学校をなくすという徹底した試みもあるが、日本ではそこまで至っていない。今次改訂された学習指導要領では「特別な配慮を必要とする児童(生徒)への指導/障害のある児童(生徒)などへの指導」という項目が追加された。

教育現場では、多くの創意工夫が求められ、苦勞も多いだろうが、インクルーシブ教育によって実現される共生社会は、様々な人が生き生きと活躍できることになり、差別と偏見をなくすことにつながる。教育の力によって、痛ましい事件が二度と起こらぬ社会になってほしいと願うばかりである。